第15回　日本在宅医学会大会　プログラム別　詳細情報

カテゴリー	ランチョンセミナー　一般演題口演（優秀演題）
タイトル	Aging in Place を目指した在宅医療推進： 千葉県・柏モデルにおいて市町村行政・地区医師会と一緒に推し進める中での大学の役割と意義
日　　時	平成 25 年 3 月 31 日　12：20～12：30
会　　場	第 6 会議室
座　　長	大幸砂田橋クリニック　前田憲志先生
演　　者	東京大学高齢社会総合研究機構　飯島勝矢先生
企画趣旨	超高齢化に向かっている我が国において、特に大都市部では今後 20 年間にわたり入院需要は劇的に増大し、漫然と放置すれば急性期病院が受けきれない現象が起こり、一方で孤独死の激増等の事態も懸念される。多職種連携を充実させた在宅医療の普及および今までの医療施策の見直しが不可欠であることは言うまでもないが、そこにどう学術的側面を担っている大学が役割を果たせるのかは今後の大きな課題の一つでもある。 われわれ東京大学・高齢社会総合研究機構（ジェロントロジー）は千葉県柏市をフィールドとして課題解決型の社会実証研究を行いながら、地域のまちづくりを多角的な視点で取り組んでいる。さらに、いつまでも住み慣れたまちで暮らす、いわゆる『Aging in Place』を達成するためにも、このモデル構築を通して、東京大学が市行政および柏市医師会を中心とした各職能団体と一丸となって在宅医療推進を行いながら、真の地域包括ケアシステムの具現化を目標としている。この柏モデルの特徴として、①地域の開業医（かかりつけ医）を中心とした多職種に対して、同行訪問とグループワークの重要性を強調した在宅医療研修プログラム開発、およびその汎用性の探究、②主治医・副主治医制の下で、多職種全員が最期まで在宅にかかわる連携体制と情報共有システムの開発、③これらを市全体で展開するための地域医療拠点の導入と今後の活用、④在宅ケアを市民自身が学ぶための住民啓発などの場作り、などである。これらの活動の中で、学術の立場である当研究機構が長期的展望を熟慮した上でのモデル構想の打ち出し、そして最終的な評価（個々の quality of life に加えて、まち全体としての quality of community も）も担っている最大の役目となってくる。現在の活動において「点から面への展開」が求められており、そこには市町村行政と地区医師会、地区職能団体の積極的な取り組みに対して、大きな役割を担っている大学としての経験をここに報告する。